## episode 39　魔法のような料理の味を探し求めて

投稿者　中杉 さおり さま（青森県）

『きつね森の山男』
馬場のぼる 作
こぐま社　1974年

*魔法のようなその料理を、わたしは『きつね森の山男』という絵本で知った。*
*お殿様のひどい冷え性を一発で完治させてしまった、山男の「ふろふき大根」。*
*寒がりで、毎年冬になると青っ洟を垂らしていたわたしは、ぜひ食べたいと思った。小学２年生のときのことだ。*
*煮た大根は嫌いだと言う母をなんとか説得し、作ってもらった。*
*絵本と同じように、輪切りにした大根を煮て、味噌をつけて食べる。*
*湯気の立つそれをのみこめば、身体がぽかぽかに温まる……はずだったのだが。*
*なにか足りない気がする、とわたしは思った。たしかに、お皿に盛られたふろふき大根は湯気を立てていて、*
*口を火傷するほど熱かった。でも、冷え性が速攻で治るほどかというと……それほどでもない。*
*作ってくれた母の手前、「絵本と同じ！」と喜んで見せたものの、期待外れな感じは拭えなかった。*

*そんな出来事から二十年ほど経った昨年。わたしは、夫の転勤に伴って青森県に移住した。*
*その土地は、真冬になると－10℃前後まで気温が下がる。*
*わたしが生まれ育った瀬戸内地域とは、20℃くらいの温度差がある。生まれて初めて経験する圧倒的な寒さに、*
*わたしはただ、震えることしかできなかった。と、そこで思い出したのが、ふろふき大根だ。*
*職場の人にいただいた大根があったので、あまり期待せずに作ってみた。前回同様、味付けは味噌のみ。*
*ただし今回は、赤みがかった津軽味噌だ。寒さで痺れた舌を包むような、こっくりとした味。*
*一口かじる。飛び出した熱い汁が、じゅんわりと舌を焼く。*
*大根は、飲み下したあとも胃の中で存在を主張している。まるで「飲むカイロ」だ。*
*内側から温められた身体が、外気との温度差にぶるりと震えた。「これだったんだ、山男のふろふき大根は」*
*「空腹は最高の調味料」という言葉があるが、ふろふき大根の場合は「寒さ」が調味料だったのだ。*
*食べ終えたわたしは、額に滲んだ汗を拭った。*

*後に知ったことだが、絵本の作者・馬場のぼるさんは、青森県三戸町のご出身だった。*
*故郷で食べたふろふき大根の味が忘れられなくてお描きになったのだろうかと思うと、*
*いっそうあの絵本が愛おしく感じられるのだった。*

*「絵本の日アワードin FUKUOKA 2025」投稿作品より*

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

## 「漫画家の絵本の会」名だたるメンバー

日本の絵本作家・画家には、戦前からの童画家・挿画家に系譜される歴史があります。ところが1960年代になって、戦前の童画家と連続性をもたない、新しい絵本作家が登場したのです。それはデザイナー、漫画家、イラストレーターなどで、幅広い意味での美術の仕事が社会的に重要性を増した時代背景と重なります。

とりわけ注目されるのは、漫画家です。やなせたかし、前川かずお両氏を筆頭に、1972年には、「漫画集団のメンバーで絵本の仕事をしている仲間を集めて会を作り、展覧会をやろう」という趣旨で、「漫画家の絵本の会」が発足しました。集まったのは、多田ヒロシ氏、長新太氏、手塚治虫氏など10名のそうそうたるメンバーで、1974年、第１回漫画家の絵本の展覧会が開催され、その後30年近く活動が続けられました。

そのうちの一人が、『11ぴきのねこ』シリーズで令和の現代でも人気を博す馬場のぼる氏です。

## 売れっ子漫画家・馬場のぼる誕生

手塚治虫氏や福井英一氏とともに「児童漫画界の３羽カラス」と呼ばれた馬場氏は、1927（昭和２）年、青森県三戸（さんのへ）町に生まれました。中学卒業後、海軍飛行予科練習生に入隊し、1945年６月特攻隊に選ばれますが、訓練のさなか終戦を迎えました。

三戸に帰郷した馬場氏は、小学校の代用教員やポスター描きなど職を転々としながら、独学で漫画の勉強を始めます。この頃、のちに生涯の親友となる手塚治虫氏の『新宝島』に衝撃を受け、漫画家を目指して1949年に上京します。すると、その年のうちに学習誌の仕事を手がけることになり、翌年、連載漫画『ポストくん』でデビューを果たすのです。こうして馬場氏は、瞬く間に人気児童漫画家としての地位を確立したのです。

## 絵本作家・馬場のぼる 満を持して登場

やがて訪れた1960年代、馬場氏は、大人（おとな）漫画とオーバーラップさせながら、絵本の世界に転向していき、1963年『きつね森の山男』で絵本作家としてデビューします。漫画家になってすぐの頃から、「いつか絵本を描いてみたい」と思っていたのですが、「当時は絵本がまじめ一本の路線を走っていて、とても漫画家なんぞがやる仕事という雰囲気ではなかった」と述べています。

初の絵本は、岩崎書店が「一流の漫画家とデザイナーが作った最高のマンガ！」というキャッチコピーで刊行した「ポニー・ブックス」シリーズの一冊として出版され、翌年には「サンケイ児童出版文化賞」を受賞しました。

## 作家の生き方そのものを語る作品

馬場氏がもつ漫画家としての「絵で語る」力に注目したのは、佐藤英和氏です。1966年にこぐま社を立ち上げると、「絵で語る」絵本づくりに取り組みました。1967年、馬場氏がこぐま社から最初に出した絵本が、『11ぴきのねこ』なのです。

佐藤氏は、本当にいい本は出し続けることが大事と考え、岩崎書店で絶版になっていた『きつね森の山男』の絵を描き直してもらった改訂新版を1974年、こぐま社より出版します。このこぐま社版は、現在でも版を重ねるロングセラーとなっています。佐藤氏の、「馬場先生の本を大事にしたい」という思いが貫かれた作品なのです。

佐藤氏に限らず、本作は、馬場のぼる氏の生き方そのものだと多くの人が評しています。児童漫画、少年漫画、大人（おとな）漫画、そして絵本の世界へと表現の場は時代とともに移り変わっていった馬場氏でしたが、その物語世界は常に変わることなく、確固として存在し続けているのです。

**文献**

1）馬場のぼる：馬場のぼる ねこと漫画と故郷（ふるさと）と，こぐま社，東京，pp.70-73, 2017.

2）佐藤英和：絵本に魅せられて，こぐま社，東京，pp.163-187，2016.